様式第４

論　文　要　旨

区　　分	甲・(乙)	氏名	中　嶋　真理子　　㊞

当院小児歯科外来における抗菌薬処方傾向に対する抗菌薬薬剤耐性(AMR)対策の効果

研究目的

本邦での抗菌薬薬剤耐性(Antimicrobial Resistance；AMR)対策の推進のためのアクションプランが発表されたことをうけ，当院においても 2016 年より AMR 対策に取り組んでいる。そこで小児歯科外来（以下，小児歯科）における経口抗菌薬使用について経年的な変化を調査した。

材料および方法

2014 年 1 月 1 日から 2021 年 12 月 31 日までに当院小児歯科外来を受診した延べ患者 90,178 人を対象とし，データの標準化には，外来患者 1 日・1000 人あたりの抗菌薬使用密度（Daily Outpatients Dose; DOD)を用いた。さらに,小児科外来（以下，小児科）との比較も行い， 抗菌薬使期間（Days of Therapy;DOT)も指標として用いた。

結果

抗菌薬処方は，AMR 対策前は第 2・3 世代セファロスポリン系が全体の 95%以上であったが，対策後は減少に転じ，2019 年以降はペニシリン系が 95%以上であった。各年度の DOD 値も減少傾向をみせ，2021 年度は最も低い値を示した。

DOD，DOT の 2 種の指標を用いた小児科との比較では，抗菌薬種類の割合において，小児歯科からの処方では 2 つの指標が示す傾向に大きな違いを認めないが，小児科では異なる傾向となることが分かった。

考察

小児科と小児歯科で異なる傾向が認められたことは，小児歯科では処方日数などが画一的に決定されていることに起因すると考えられた。

今回の調査によって医療従事者への AMR 対策教育の効果を確認することができた。さらなる抗菌薬の適正使用を推進するためには，継続して定期的に AMR 対策教育を続けていく必要がある。